

第35期第4回青森県社会教育委員の会議 会議概要

日時	令和3年10月11日(月) 10:00~12:00
場所	青森県庁南棟5階 教育委員会室
出席者	<p>《委員》敬称略6名 吉川 康久 永澤 正己 深作 拓郎 松浦 淳 小笠原 秀樹 岩本 美和</p> <p>《事務局》10名 渡部 泰雄(生涯学習課長) 花田 千穂(学校地域連携推進監・課長代理) 大島 義弘(生涯学習課 企画振興グループ 主任社会教育主事) 工藤 健夫(生涯学習課 地域連携推進グループ 主任社会教育主事) 他6名</p>
内容	<p>1 開会 2 案件 (1) 実地調査の結果報告・分析 (2) 重点審議事項2に係る答申骨子案(構成、方向性)について (3) その他 3 閉会</p>
配付資料	<p>次第・青森県社会教育委員名簿・座席図 <資料> 1-① 実地調査先一覧 ② 実地調査の結果 2-① 答申の骨子(構成案) ② 実地調査における特色ある取組 3 青森県生涯学習審議会・青森県社会教育委員の会議スケジュール</p> <p>《参考資料》 1 第1回会議における意見の整理 2 第2回会議における意見の整理 3 第3回会議における意見の整理 4 諮問書 5 総合調査研究の結果概要 6 総合調査研究の結果における家族形態別特徴</p>

1 開 会

(内容省略)

2 案 件

議長 今回で4回目の会議となるが、7～8月に実施した実地調査では、暑い中、御協力いただき感謝申し上げます。本日は実地調査の報告・分析が会議の中心となるが、実地調査で得られたものを青森県の家庭教育・子育て支援に生かしていけるよう、今日もまた皆様からぜひ活発な御意見をお願いしたい。それでは次第に従って、案件（1）実地調査の結果報告・分析について、事務局から説明していただきたい。

(事務局から説明)

議長 それでは、委員の皆さんから実地調査について御報告いただきたい。

議長 まず始めに私から、みらいねっと弘前について報告する。この団体は、設立後3年が経過した社団法人であるが、もともとはスポネット弘前というスポーツNPOが母体となっている。その活動の中で、食の重要性や貧困問題と直面するようになり、子ども食堂や学習支援、居場所づくりに関わる取組をスタートさせた。この団体の特徴としては、中間支援ではないが、地域の小さな団体のつなぎと支援を重視している点を挙げることができる。子どものための様々な活動をしている団体をつなぐ役割を担っていくことで、そういった団体が継続して活動していける仕組みをつくりたいと考えている。この団体の継続性については、地域の団体間のつなぎを活動の中心としているので、実質3名の職員でコロナ禍の影響をあまり受けずに活動できている。課題としては、支援を要する人たちとの「距離感」の取り方が難しいということが挙げられる。支援を要する人たちとの関係性がつくれている点は非常にやりがいがあるが、相談を受ける回数や時間帯について運営側の限界もあるとのことである。家庭教育支援に直接関係ないかもしれないが、活動資金面については、エネルギーの地産地消事業に本格的に取り組むことを検討している。

議長 続いて、ファザーリングジャパン青森について報告する。おそらく、ファザーリングジャパンという名称を一度は聞いたことがあると思うが、父親のネットワークづくりや、男性による育児参加、育児支援の促進を目的に立ち上げられた全国組織で、青森では、2012年に設立されている。この団体の調査で特に印象的だったことは、活動を始めてからの意識の変化として、妻には妻の人生がある、それまでは自分のことと子どものことしか考えていなかったことに気付いた点を挙げていることである。自分自身共感できるところもあり、子どもに対する意識がある一方で、自身の妻に対する意識は徐々に薄れていく傾向が多く家庭に見られると思うので、そういった点も重要なポイントとして話を伺っていた。この団体の活動としては、個人での講演・講座活動を展開し、伝えていくことを使命としていて、料理・遊び・夫婦のコミュニケーションに関するワークショップや、育ボス・ライフワークバランス等の講演活動を行っているが、お互いの経験を語り合い、共感し合うことを活動の中で丁寧に取り組んでいるところが、大変面白い取組だと感じながら話を伺った。

委員 子どもネットワーク・すてっぷについて報告する。この団体は、五所川原おやこ劇場を発展させる形で、家庭教育に熱心な母親が集まって発足させた団体で、体験活動、子育て支援、子どもまつり、地域づくりの4つを柱として、非常に多くの活動に取り組んでいる。活動の中では、元器械体操の国体選手である団体の代表を中心に、運動の苦手な子どもに対して、明るく楽しく運動に参加できるように働きかけることや、子どもが言うことを聞かないときに、子どもとの向き合い方や適切な叱り方、褒め方を職員間で確認することを意識的に取り組んでいる。相談業務では、相談件数が増加傾向にあり、相談内容も深刻なケースも見られるようになってきているが、カウンセラーの資格を持っている職員はいないため、専門機関につなぐことを大事にしている。また、発達障害の可能性のある子どもたちを対象とする取組では、地域の多様な機関と連携し、福祉団体や市の教育委員会から専門的なアドバイスを受けられるようにしている。活動資金面では、市の子育て支援事業とタイアップして、親子の居場所づくりや相談業務等の取組を展開できているが、自主財源を確保して安定的に活動したいという希望を持っている。課題や困っていることとしては、団体設立当初よりも多くの取組を展開するようになってきているので、事務担当職員の不足や学校との連携促進といったことを挙げている。団体の代表を個人的に知っているが、その明るく、前向きな人柄がメンバーや利用者伝わっていて、これからの活動がさらに楽しみな団体との印象を持っている。

委員 ふたご・みつごのひろば「ついんくる」について報告する。この取組は、青森県子ども家庭支援センターアピオあおもりの自主事業として実施しているもので、かつて私と一緒に多胎児サークルで活動していたメンバーが運営を担当している。活動内容としては、悩みを聴き合うピアカウンセリング、子育て支援情報の提供、おさがり交換会などを2か月に1回の頻度で開催している。その中では、子どもたちがおもちゃで遊んでいる近くで、母親たちがゆったりと交流したり、子育ての悩みごとについて気軽に職員にしたりできる場を提供している。実際に参加している人の話では、LINEのグループ機能を活用して参加者同士のネットワークをつくり、様々な情報交換を行っているとのことである。コロナ禍において、消毒作業等、気を付けなければならないことがいろいろとあるが、対面で相談や交流の場を提供できていることが、精神的な部分で利用者に安心感を与えることができていると考えている。活動を進める上で工夫していることについては、多胎児の親は子どもを連れて移動するだけでも大変なので、そういった特有の苦労についても利用者に寄り添う形でサポートすることを意識的に行っている。今後取り組みたいこととしては、子どもがこども園や幼稚園、保育所等に入園すると、活動に参加しなくなるので、ランチ会など、かつて参加していた人も交流できる機会をつくりたいと考えている。

委員 むつ下北子育て支援ネットワークひろばについて報告する。団体が設立される際、組織運営に関して相談を受けていたこともあり、団体の代表とは個人的に知り合いである。この団体の設立と同じ時期に、県内各地にあったおやこ劇場をNPO法人化することにも関わっていたが、障害者支援にも携わっている点をこの団体の特徴として挙げるができる。活動の目的としては、子育ての社会化を掲げていて、子育て中の親が施設に子どもを預けて終わりということではなく、地域の人たちが研修を受けることでサポーターとして子育て中の親を支える仕組みをつくって、活動を続ける中で、子育て中の親を含めてサポーターが徐々に増えてきている。運営面では、スタッフの確保等で苦労した時期もあるが、市の子育て支援や障害者支援事業を請け負うことで安定するようになり、現在は事務局長を配置できるようになっている。子どもを預かることについては、利用者の自宅での預かりでは密室になる不安感もあることから、コーディネーター

が常駐している場所で、集団の預かりを行うことで利用者の安心感につなげている。また、希望に応じて送迎も行っていて、利用者の状況に寄り添う支援ができています。課題としては、子育ての今と昔との違いを挙げていて、子育て中の親が気軽に隣近所の人に困りごとを相談できなくなっているのが、そういった状況に対応した支援により一層取り組んでいかなければならないと考えている。また、サポーターの方々には、有償で活動に携わってもらっているが、十分な金額を渡せていないと考えているため、少しでも多く上乘せして渡せるようにしたいということも課題として挙げています。最後に感想としては、この団体は子育て支援に加えて障害者支援にも携わり、そういった活動を継続できていることが信頼感へとつながり、地域から必要とされる団体になっていると感じている。

委員 つがる絆プロジェクトについて報告する。この団体の代表が、現在暮らす地域へ移住したことを機に、母親たちの居場所や交流の場をつくりたいと考えるようになり、活動を始めた。団体の設立当初は、自分たちが楽しむことを中心に活動していたが、活動を続ける中で子育てに関する様々な悩みごとに直面するようになり、発達障害についての啓発事業等、そういった悩みごとの解消に多少なりともつながる活動も取り入れるようになった。活動を進める上では、チラシの作成や会場使用料の減免等で、地域の大型商業施設や市の教育委員会と効果的に連携ができています。苦労していることとしては、早くスタッフを引き受けてくれる方が少ないことを挙げていて、現在は無償でお願いしているが、今後は有償にしたいと考えている。また、今後は中高生等を巻き込んだ活動を考えているため、学校との連携の強化も課題として挙げています。この団体の代表自身が悩みごとを抱えながら子育てをした経験者だが、代表の明るく前向きな姿勢が、団体の継続した活動やネットワークの拡大につながっているという印象を受けた。

委員 はちのへ未来ネットについて報告する。この団体は、子どものために活動していた個人・団体が、福祉や教育の垣根を超えてつながることで、子どもの健全な育成を図るために設立された。活動内容としては、こどもはっちの運営を中心に、乳幼児から園児、児童生徒、保護者と幅広い事業を展開している。それらの活動の中で、高校生や保護者などを活動の受け手としてだけでなく、運営の主体側に引き込む手法がうまくできている点が特に印象に残っている。運営面では、こどもはっちの運営を請け負うことで活動資金がある程度確保され、常駐のスタッフを複数名配置できていて、この団体の幅広い子育て支援事業を支えている。この団体の代表自身が子育ての経験者で、母親目線の支援事業を精力的に提供している印象を受けたが、団体の継続については、若い世代をうまく巻き込んで活動できているものの、次の世代は団体の継続にこだわらず、新規団体の立ち上げも含めて判断すればいいと考えていて、大変柔軟な発想に感銘を受けた。現代はスマホに情報が自動で次々として入ってくる時代なので、ホームページやブログの開設、LINEを利用した情報発信を効果的に活用できていることが利用者の増加につながっていると考える。特別な支援を必要とする家庭に対しては、どうしても専門家の意見が欠かせないので、専門機関との連携の強化が今後の課題として挙げられている。

委員 しるくはあとについて報告する。この団体も代表自身が子育ての経験者で、子育てメイトや社会教育委員、地域コーディネーターに携わる中で、地域での子育て支援が必要だと考えるようになり、団体を立ち上げた。運営面での特徴としては、あまり無理をせず、自分たちのできる範囲で活動を展開していることが、継続した活動につながっていると考える。現在、コロナ禍で活動がかなり制限されているが、コロナ禍以前は未就学児や小学校低学年の親と相談活動や、お寺での座禅会等の体験活動を行っていた。活動

を進める上で特に印象に残っていることは、親の学びを大事にしている点で、発達障害といったことについても、その特性や対応策を親がしっかりと理解することで、抱える悩みや不安の解消につながると考える。この団体は大きな収入源があるわけではないが、有志のつながりが継続した活動を支えている。

委員 子育てオーダーメイド・サポートこももについて報告する。もともと他県で暮らしていたこの団体の代表が、本県への移住後まもない時期に出産した際に、知り合いが少なかつたことから母親サークルを立ち上げたが、その活動を経て、子育てをする上で産前産後の大変さを改めて考えるようになり、この団体を立ち上げた。活動内容としては、妊婦や子育て中の親を対象とする家事代行サービスを軸に、母親の交流の場や子どもたちの遊び場の提供といった事業を展開している。特徴的な点としては、アウトリーチ型の家事代行サービスを通じて、利用者との関係性の構築やニーズの把握ができてきている点である。産前産後の大変さは、当事者ならではのものも多いので、一人一人の要望に応じたオーダーメイドの支援は、そういった状況の母親の悩みや不安の解消につながることができている。他の機関との連携については、自治体の補助事業を有効に活用することで利用者の負担軽減を図るとともに、子どもたちに遊び場を提供する事業では、大学生ボランティアに協力してもらっている。課題としては、活動の担い手を増やすための仕組みづくりや専門機関との連携強化といったことが挙げられる。活動の中では、かなり緊急性が高いケースに出会う機会もあり、やりがいを感じている一方で、自分たちだけでは解決できないプレッシャーも感じているという話が特に印象に残っている。

委員 父親ネットワーク北海道について報告する。稚内市でおやじの会を立ち上げていたこの団体の会長が、札幌市で活動していた事務局長と意気投合し、その他の自治体も巻き込んで活動を始めた。運営上の特徴としては、団体の規約や会員数、会費などにとらわれずに、その時々課題に柔軟に取り組んでいる点を挙げることができる。また、会長をはじめとするメンバーがそれぞれ直面している課題と事務局長の全国に広がるネットワークをうまく組み合わせる活動できている点も特徴的である。活動内容としては、年1回の全体交流会を中心に、メンバーがそれぞれのおやじの会の中で若者を巻き込みながら活動している。特に印象的な取組としては、シングルファザーハンドブックの発行で、シングルファザーの実際の体験談をもとに、当事者目線での困りごとへの対応策やアドバイスがまとめられている。堅苦しい規約などにとらわれず、補助金などもうまく活用しながら柔軟に活動できていることが、継続した活動につながっていると考えられる。

議長 それでは最後に小糸公民館プレイルームについて報告する。この事業を実施している千葉県君津市は新日鉄の製鉄所を中心に栄えていて、工場のある市街地と山村が混在するという地域性が見られる。その君津市では、従来から社会教育に力を入れていて、市内の各公民館には社会教育主事の有資格者が公民館主事として複数名配置されている。君津市の公民館では、全国的にはPTAに委託することの多い家庭教育学級を公民館事業として実施していて、そういった学習者の主体的な学びという素地がかなり育っている地域性の下、小糸公民館プレイルームが展開できている。活動内容としては、公民館における保育活動となるが、家庭教育学級生を含むプレイルーム運営委員会が運営に大きく関わっている点が特徴的である。家庭教育学級生の関わりについては、利用者としての家庭教育学級生が卒業後に運営委員として関わるケースも見られ、段階的な人的循環ができている点も特徴的である。この取組は、今回の実地調査の中で唯一行政機関が実施している事業で、行政と住民が一体となった取組を展開している点で、組織形態、運営形態も含め、その他の取組とは違う特殊性が見られる。

議長 以上、11団体の実地調査について報告いただいたが、ポイントとして、一つ目は、それぞれの組織形態に特徴があった点、二つ目は、それぞれの団体の視点に即した問題意識や実践があり、それに伴った実施形態に特徴があった点、三つ目は、次世代とのつながり方についてもそれぞれに特徴があった点が挙げられるかと思う。

(休憩)

議長 案件(2)重点審議事項2に係る答申骨子案(構成、方向性)について、まずは事務局から説明していただきたい。

(事務局から説明)

議長 事務局から説明いただいた答申の構成案としては、柱立て1の「家庭教育支援をめぐる動向」では、令和2年度に実施した「家庭教育支援の充実のための実態等把握調査」で得られたことを含めて、青森県における家庭教育支援の実態と課題を盛り込めればよいと考える。また、家庭教育の定義についても、昨今の状況を踏まえた上で青森県ならではのものをもう少し議論する必要があると感じている。柱立て2の「特色ある家庭教育支援団体の取組」、柱立て3の「今後の家庭教育支援の在り方」では、本日御報告いただいた実地調査の結果から得られた内容を盛り込んでいくことになるが、見出しの文言を含めて、委員の皆さんから御意見をいただければと思う。

議長 どの観点についてでもよいので、御意見をいただきたい。

委員 今回の実地調査では、無償のボランティアの協力によって、多くの団体の活動が支えられている印象を受けている。一部の団体では、自治体の事業を活用して有償で協力をお願いしているところも見られたが、基本的に家庭教育支援は、多くの家庭に必要なもので、そのすべてを有志で賄うのは難しいと思うので、根本的な解決につながるような方策を考えることができればよい。その基本となる制度としては、国、県、市町村といった、それぞれの行政区画に応じた支援内容を検討し、土台となる部分を構築した上で、ボランティアの協力についても考える必要がある。また、現代は所得や時間の世代間格差が大きく、若い世代ほど余裕がない傾向が見られるので、構造的な問題についても触れられるとよい。

委員 今回の実地調査では、時代の変化に伴い、子どもたちの向き合い方についても昔とは違うことを実感しながら活動している団体も見られた。そういった点も踏まえて、家庭教育の捉え方についても、現代的な視点を含めて考える必要がある。

委員 子育ての負担としては、やはり時間的負担と経済的な負担が大きいと思う。その負担を少しでも解消するために多くの団体が活動しているが、基本的には多くのボランティアの協力によってその活動は支えられている。有償にできれば、協力者を増やすことにつながると思うが、資金面で苦勞している団体も多いのが実情である。また、現代的な傾向としては、スマホを活用して知りたい情報を得ることが多くなっているが、今回の実地調査を通じて、実際に顔を見ることによる安心感など、対面での活動のよさについても改めて実感することができたと考えている。

委員 今回の実地調査では、組織形態にあまりこだわらない団体も見られたが、組織形態そのものが課題の解決につながるわけではなく、どの課題にどう向き合ってどう解決するのかを論じる必要があると思う。また、一昔前だと地域の人たちが無償で子育てを支援するのが当たり前だったと思うが、現代は有償での支援も考えなければならなくなっている。そういったことも踏まえて団体の継続性についても答申で触れる必要があると考える。答申の構成案については、特に異論はなく、盛り込む内容が重要だと思う。

委員 私も答申の構成案については、特に異論はない。現在、私自身が高校生と小学生の子育て中の親であるが、自分の親の世代が受けた支援と同じものを、現代の子育て世代が受けようとする、経済的には何倍もかかってしまうと考えられ、決して明るい状況とは言えない。そういった状況下での子育て支援を考えた時、やはり職場以外での、親子でホッとできるような、人との関わりが重要になると考える。今回の実地調査で、利用料をもらって活動している団体では、利用料を払えない利用者をどう救うのかを課題として捉えている団体も見られた。簡単に解決策は出てこないと思うが、福祉、医療、教育等、部局の垣根を越えたシームレスな連携についても答申で触れることができればよいと考える。

議長 本日の会議でいただいた御意見の共通点としては、構成案に対しての異論は特になく、むしろ中身をどう豊かにするかを考える必要がある。また、重要なポイントとしては、一つ目として、家庭教育をどう捉えるかということがあり、親の支援という視点だけでなく、子どもの育ちという視点についても、実地調査の結果を踏まえてまとめられるとよい。二つ目として、団体の持続可能性の問題が挙げられ、定年延長に伴って現役世代が拡大している現代において、地域や親からの支援が受けにくくなっている状況もあり、そういった点からも団体の存在意義は大きいと考えられる。三点目として、利用料を負担できない家庭への支援が挙げられ、そういった家庭への支援についても考える必要がある。四点目として、行政区画に応じた支援内容やボランティアの関わり方といった支援の在り方が挙げられる。多くの有志の協力によってそれぞれの団体の活動のかなりの部分が支えられていると思うが、有志の活動には強みと限界がある。強みとしては、行政とは違い、課題に対してフットワークが軽く動ける点があり、弱みとしては、モチベーションや活動をどのように継続させるかという課題がある。以上の視点も含めて、次回の会議では議論を深めていきたい。

議長 それでは、案件（3）その他に入る。事務局から今後のスケジュールについて説明していただきたい。

（事務局から説明）

議長 その他、御意見があればお願いしたい。

委員 参考資料の6では、子育ての悩みや不安に関して、子どもの勉強や進学のことへの回答が多いが、希望する家庭教育（子育て）支援では、子どもが安全安心に過ごせる場所への回答が多く、何かしらのズレのようなものを感じている。青森市に限っての話かもしれないが、最近、小中学校の宿題の量が減っているという話を聞くことがある。学校側の対応として、家庭学習の量について家庭で判断できる幅を広げていると考えられるが、子どもの学習面への対応についても家庭教育の領域に含めてもいいと考えている。

議長 一般的な話として、以前よりも宿題の量を減らす一方で、授業での学びを厚くする傾向にあるという話を聞いたことがある。そういったことも含めて、答申案のより具体的な内容について次回の会議で検討していきたい。

3 閉会

(内容省略)